

リウイウスの墮落史観に関する若干の考察

安 井 萌*

古代ローマを代表する歴史家リウイウス(前59～後17年または前64～後12年)¹⁾が自らの時代までのローマの歴史を全体としてどう認識していたかは、主著『ローマ建国以来の歴史』(全142巻)の序言において端的な形で述べられている。それによれば、ローマ国家は人々の優れた道徳性ゆえに大いに発展を遂げたが、やがて道徳の頹廃とともに転落の一途をたどり、現在のひどい状態に至ったとされる。やや長くなるが、以下に関連の箇所を岩谷智氏の訳に基づいて(ただし一部改変した)引用しよう²⁾。

「そもそも、この仕事には大きな困難がある。700年以上もさかのぼらなければならないだけでなく、最初はささやかな始まりにすぎなかった国家が、いまでは自らの重みに耐えかねるほど大きくなってしまっている。また、大部分の読者にとっては、ローマの起源や初期の出来事などは興味の埒外であり、彼らが身を乗り出してくるのは、この無敵の国家が延々と内部抗争を繰り返す今の時代のことであるのは疑いない(4節)。しかし私にとっては、昔の事柄に目を向けているかぎりにおいて、われわれの時代が長い間目撃してきた悪徳を直視する必要がなくなるばかりか、書き手の筆を鈍らせる(事実を曲げさせるとまではいわないが)さまざまな慮りから逃れることができるということは、苦勞に見合う褒美であるといえる(5節)。」

「むしろ、各自それぞれに真剣なまなざしを向けてほしいのは、次のようなことがらである。すなわち、人々の暮らしや道徳のありようはいかなるものであったのか。ローマの支配権はいかなる人物によって獲得され、拡大したのか。また、平時、戦時におけるそのありようはいかなるものであったのか。さらには、綱紀が徐々に弛むに従って、道徳がいかに廃れてきたのかにも心を向けてほしい。それはまず建物が倒れるときのように揺れはじめ、やがて徐々に傾き、倒壊寸前となって、ついにわれわれの時代、すなわち、われわれが自らの病にもその治療法にも耐えられなくなった³⁾この時代に立ち至ったのである(9節)。」

「そもそも、持つものが少なかった時ほど、欲念も少なかった。ところが今や、富が貪欲を引き寄せ、放蕩と快楽を通じて膨れあがった欲望が、すべてを破滅と終焉に至らしめる欲動を生じせしめている(13節)。」

道徳的視点からのこうした非常にペシミスティックな史観は、決してリウイウスの独創ではない。約一世代前の先輩史家サルスティウス(前86～前35年頃)はローマの歴史に対する同様に悲観的な見方を披露しているし、またサルスティウス以前の史家たちの作品(わずかな断片を除きすべて失われた)にもいわゆる「墮落史観」の痕跡はすでに先駆的に認められる。リウイ

* 岩手大学教育学部西洋史学研究室

ウスはこうした先行作品の影響を受けつつ、さらに自らの経験も踏まえながら自己の史観を形成したとすることができるだろう。小稿では、そこでまずローマの歴史記述の伝統における墮落史観の系譜をたどったのち、次いで『ローマ建国以来の歴史』序言に現れるリウィウスの史観の特徴を考察したいと思う。

最初のローマ人史家ファビウス・ピクトル（前3世紀末）は建国から同時代までのローマの歴史をギリシア語で記した。著作は現存しないが、残された断片の一つに自国の道徳的墮落について述べたとしきものが見いだされる。ストラボンによると、ファビウスは「ローマ人はこの民族〔サビニ人〕に対する支配者となった時、初めて富を認知した」と書いているという（Strab.5.228 = HRR fr.27 = FRH fr.24）。「この民族に対する支配者となった」は一般に、ローマによるサビニの土地の征服（前290年）を指すとされる。もしそうだとすると、ファビウスがここで単に、それまで貧しかったローマ人がこの時初めて富を知った、と述べているとは考えにくい。前3世紀初めの時点で、ローマはすでにイタリア全土の統一を窺う大国に発展していたからである。「初めて富を認知した（αἰσθέσθαι τοῦ πλούτου πρῶτον）」が意味するのは、したがってむしろ「初めて富の快樂に目覚めた」、言い換えれば「これ以後富の快樂に耽るようになった」ということだろうと思われる。Th・モムゼン以来の有力な解釈によれば、これは前290年のコンスルの一人P・コルネリウス・ルフィヌスが過剰な贅沢ゆえに元老院から追放された出来事（前275年）と関連する文言だとされる。この解釈が正しいかどうか判断するのは難しいが、いずれにせよファビウスがローマ人における奢侈の始まりを、自らの時代より数十年前の征服事業に求めたということは言えそうである⁴⁾。史家が生きた前3世紀末は、エリート層の富の問題が意識され、議論されるようになった時期だった。前218年には、多くの反対を押し切って元老院議員の営利活動を規制するクラウディウス法が制定され（Liv.21.61.3-4）、また前215年にはオッピウス法により、第二次ポエニ戦争中の非常措置ながら、婦人の奢侈品（金・衣服・乗り物）の保有・使用が制限された（Liv.34.1-3）⁵⁾。ファビウスもまた同時代の元老院議員の一人として、こうした道徳的問題に関心を寄せていたことは十分考えられる。

初のラテン語による史書『起源論』を著したボルキウス・カトー（前2世紀前半）は、謹厳な政治家としてエリート層の不道徳、とりわけ奢侈に対しきわめて批判的な態度を取ったことで知られる。先述のオッピウス法の廃止や、また宴会の参加人数を制限したオルキウス法（前182年制定）の廃止が提案されると、彼は反対の論陣を張った（Liv.34.1; ORF fr.136-146）。ケンソル職を務めた際（前184年）には、悪徳な元老院議員を罰するとともに、高額な宝飾や服、乗り物、奴隷に通常より高い税を課した（Liv.39.44.2-3; Plut.Cat.18.『衣服と乗り物について』と題するケンソル在任中の演説の断片が伝わる、ORF fr.93）。伝存する演説断片の中には、豪華な建物の建設や高価な男娼・珍味の購入に対する非難の言葉が見て取られる（ORF fr.133,185; Polyb.31.25.5a）。カトーがはたして『起源論』においてもこうした道徳的価値観を反映した記述を行ったのかどうか、断片を見る限り必ずしもはっきりしない。このことはやや意外にも感じられるが、理由の一つとして考えられるのは、本書の比較的最近の時代を扱う部分（第4～7巻）では主に対外戦争が中心的に述べられていることである。つまり本書全体のコンセプトからして、ローマ人の道徳問題のような国内的話題はあまり取り上げられる機会がなかったのかもしれない⁶⁾。もっともその機会があれば、歴史作品でも彼は同国人の悪しき風

俗を批判するのを決して厭わなかったであろう。次の断片はそのような一節であるかもしれない。「金や真紅で覆われた婦人たち。頭飾り、ヘアネット、ディアデマ、金の冠、赤いリボン、腕飾り、毛皮、髪飾り」(Fest.320 = HRR fr.113 = FRH fr.109)。いかなる文脈で語られた一節かは不明だが、「金や真紅で覆われた婦人たち」は婦人の奢侈品を規制したオッピウス法を想起させる⁷⁾。

カトーより約半世紀後の史家カルプルニウス・ピソ(前2世紀後半)が、自らの時代を道徳性の低下した時代と見なしたことは疑いない。プリニウスが引用する彼の史書の一節によると、その転機となったのは前154-3年だったとされる。「さらにローマでは、ペルセウス戦争の時、カピトリウムのユピテルの祭壇に棕櫚が芽を出し、勝利と凱旋式を予告した。これが嵐で倒されたのち、マルクス・メッサラとガイウス・カッシウスがケンソルの時〔前154-3年〕、同じ場所に無花果が芽吹いた。この時以来廉恥心は失われた」(Plin.nat.hist.17.244 = HRR fr.38 = FRH fr.40)。無花果の芽吹きは墮落の始まりを知らせる予兆である。ではローマ人が廉恥心(pudicitia)を失うきっかけとなった出来事とは何か。この点に関しては、前154年のコンスルのポストゥミウス・アルビヌスと、クラウディウス・アセルスなる者が相次いで妻に毒殺された事件とする説、メッサラ、カッシウス両ケンソルの決定でローマに恒久的な石造りの劇場が建設されたこととする説があり、研究者の見方は分かれる⁸⁾。ここではこの問題に深入りするのはやめておき、ひとまず次の点に注意しておきたい。ピソが道徳的頹廢の転機となる出来事と見なしたのは、どうやらこれだけではなかったらしい。同じくプリニウスによると、ピソはマンリウス・ウルソがガラティア遠征後に行った凱旋式(前187年)について、「グナエウス・マンリウスはアジアを征服したのち、自らの凱旋式において、初めて青銅製の食事用寝台、食器棚、一本脚のテーブルを持ち込んだ」と述べたという(Plin.nat.hist.34.14 = HRR fr.34 = FRH fr.36)。リウィウスは同じ凱旋式について述べた箇所、アジアの軍隊により導入された奢侈品として、やはりよく似た品目を挙げている。「外国由来の贅沢の始まりはアジアの軍隊により首都へ導入された。彼らは初めて青銅製の食事用寝台、高価な寝巻きやベッドカバーやその他の織物、また当時は贅沢な調度品と見なされていた一本脚のテーブルや食器棚を持ち込んだ」(39.6.7)。彼が典拠の一つとしてピソを用いた可能性はかなり大きいと言えるだろう。とすると、リウィウスがマンリウスの軍隊によるこの行為を「外国由来の贅沢の始まり(origo peregrinae luxuriae)」と評したコメントもまたピソに基づくかもしれない⁹⁾。もしそうならば、ピソはローマ人の墮落の過程を(単一の出来事で区切るのではなく)多元的に理解していたことになる。

サルスティウスは前40年代後半から彼の死までの約10年間のうちに、モノグラフ『カティリナの陰謀』『ユグルタ戦争』と前78年以降の同時代史を記した『歴史』の計3篇の史書を執筆した(三作品はおそらく上記の順序で書かれた)。これらのうち先に書かれた、現存する二篇のモノグラフには、彼の墮落史観を非常に明快な形で見て取ることができる。関連の箇所を栗田伸子氏の訳に拠って示そう。

「さてこのように、国内でも戦場でも良き習俗が培われていた。最大の協和と最小の貪欲とがあり、正義と善とは彼らの間では法に基づく以上に天性によって行き渡っていた。争いと不和と抗争は敵に対してなされ、市民と市民は徳をめぐって競争するのだった。彼らは神々への祈願においては盛大であり、家庭では節儉に努め、友人には忠実であった。二つの技、すなわち戦争における大胆さと、平和がもたらされた時の公平さをもって、彼ら

は自己と国家とに心を配った。(中略)しかし労苦と正義によって国家が成長し、大王たちが戦争によって平定され、猛き諸民族と強大な諸国民が武力で従えられ、ローマの支配権の好敵手たるカルタゴが根絶され、全海洋と全大陸が扉を開いた時、運命は狂乱し始め、すべてを混乱に陥れ始めた。労苦にも危険にも、不安で絶望的な事態にも容易に耐えた人々にとって、閑暇と富とは、他の場合なら望むべきものなのに、重荷とも災いの元ともなったのであった。かくして、まず金銭欲が、次に支配欲が増大した」(Cat.9-10)。

「ところで、党派と派閥の、およびあらゆるたぐいの悪しき習俗はローマにおいては、ほんの何年か前、閑暇と、人間が至上のもののみならず諸物の過剰から生じた。なぜならカルタゴの滅亡以前はローマの人民と元老院は穏やかに中庸を保ってお互いの間で国家を運営しており、栄光や支配をめぐる争いは市民の間には存在しなかったのである。敵への恐れが市民団を良き慣習の中につなぎ止めていたのであった。しかしこの恐れが心から去ると当然のことながら順境が愛するもの、つまり放縦と傲慢が襲ってきた。このように逆境の中で人々が渴望した閑暇は、実際手に入れてみると、残酷で苛烈なものだったのである。すなわち門閥貴族層はその地位を、人民はその自由を濫用し始め、誰もが自分のために引き寄せ、奪い、かっさうようになった。かくしてすべては二つの党派に引き裂かれ、その間にあって国家は粉碎された」(Iug.41)。

両作品ではともにカルタゴの滅亡(前146年)がローマ人の墮落の転換点とされている。ただつぶさに見ると、両者には多少の認識や言い回しの違いが認められる。まず『ユグルタ』では外敵の脅威(「敵への恐れ(metus hostilis)」)が失われたことがローマ人の放縦と傲慢をもたらしたとされる。これに対し『カティリナ』では「敵への恐れ」への直接的な言及はなく、運命が狂乱し混乱を引き起こした、との言い方がなされるのみである。もっとも、労苦や危険、不安に代わって現れた閑暇・富が災厄の原因となった、との後者の認識は、前者のそれと基本的にはそう違わない。『カティリナ』でも「敵への恐れ」そのものは、暗黙のうちに前提されていると言えそうである(さもなければ、なぜカルタゴの滅亡が転換点とされているのか理解できない)。むしろより大きいのは、前146年以前のローマに関する両作品の認識の違いである。『カティリナ』では、この時代は「法に基づく以上に天性によって」正義と善が行き渡っていたと、全面的に明るいイメージで描かれる。これに対し『ユグルタ』では、「敵への恐れが市民団を良き慣習の中につなぎ止めていた」と、前作における手放しの楽観的イメージが修正されている。本作品でローマ人の道徳性に対する著者の悲観はより強まり、彼らの悪徳を抑止する歯止めとして、「敵への恐れ」の重要性が強調されることになったと考えられる。

三作品中最後に書かれ、今日本文が失われている『歴史』において、サルスティウスの史観はさらに変化したと見られる。残存する断片からは、全体として次のようなローマ史のイメージが浮かび上がる。共和政の開始以来ローマ人は2つの集団(貴族と平民)の間で互いに激しい対立と抗争を繰り返した(1.11M)。第二次ポエニ戦争の勃発とともにこの争いはようやく終息を迎え、その後第三次ポエニ戦争までの間、「国家は最良の習俗と最大の協和とでもって営まれた」(1.9M)。ところが「ひとたびカルタゴ人の脅威が除かれると、争いを繰り返す閑暇が生じた。幾多の騒擾、内紛と、そしてついには内戦が起こった」(1.12M)。「この時から、わが祖先の慣習は、それまでのように徐々に低下するのではなく、あたかも急流のごとき勢いで転落したのである」(1.16M)。以上のように、『歴史』でもカルタゴ滅亡に伴う「敵への恐れ」の消滅が転機と位置づけられており、この点で『ユグルタ戦争』と変化はない。しかし前作で

は、それ以前の時代には良き習俗が曲がりなりにも——外敵脅威のおかげで——保たれていたとされるのに対し、本作においては、ローマ人の道徳性は初期の段階から少しずつ下降しつつあったのであり、カルタゴの滅亡はこの傾向にさらに拍車をかけたとされるのである。サルスティウスのペシミズムは、第三作に至ってその度合いをさらに増したとすることができるだろう¹⁰⁾。

前146年をローマ史の転換点とする見方それ自体は、すでにサルスティウス以前から存在したかもしれない。彼とほぼ同時代のギリシア人史家ディオドロスによると、第三次ポエニ戦争勃発前にローマの元老院でスキピオ・ナシカは次のように述べ、開戦に反対したという。カルタゴが引き起こす恐怖ゆえに、ローマ人は互いに協和を保ち、また服属民に対し公正に振る舞ってきた。この恐怖が失われるや、国内では内戦が起こり、国外では服属民が苛酷な支配を行うローマ人に対し憎悪を抱くようになるのは必定である。ゆえにカルタゴは存続させられるべきである、と(Diod.34/5.33.3-5)。この話が史実かどうか不確かであり、筆者はやや懐疑に傾くが、しかしナシカがこのような主張を繰り広げたことを完全には否定できない¹¹⁾。だがいずれにせよ、W・ホフマンが論じたように、「敵への恐れ」の主張がどの時期であれローマの対外政策において何らかの地歩を占めることはなかったと考えられる¹²⁾。それはむしろ机上の議論、議論のための議論の場にあつらえ向きのものであった。キケロの若年時の著作『発想論』には、「カルタゴを残し、われわれは恐れを抱き続けるべきか、それともこれを破壊するべきか」という論題が記されている(1.11.72)。彼が修辞学を学んだ前90年代の学校で、これは好んで取り上げられた弁論のテーマだったと思われる。おそらく「敵への恐れ」は、そこで「カルタゴを残すべき」との立場に立って模擬弁論を行った生徒たちの常套的な論拠となったに違いない。キケロ世代もしくはそれ以降のローマ人知識人にとって、カルタゴの存続をめぐるこうした論題はほとんど周知のものだっただろう。では、カルタゴの滅亡はローマ国家に良からぬ結果をもたらすだろうとの懸念が、いつどのように、ローマ人のモラルはこの出来事を契機に低落したとの歴史認識へ転化したのか。これについては想像するより他ないが、一つの可能性として前80年代あたりが考えられる。スラとマリウス・キンナ派による苛烈な内戦の経験は、一部の人々にカルタゴの存続をめぐる論題、ナシカが言ったとされる主張を思い起こさせ、やはりあれが転機だったかとの思いを抱かせたかもしれない¹³⁾。もしそうだとすると、前146年を転換点とする見方はサルスティウスの創見ではなかったことになるが、しかしいずれにせよ、これを後世の人々に強く印象づけたのが類まれな文才とパトスを併せ持つ史家の一連の作品だったことは紛れもない¹⁴⁾。

リウィウスが『ローマ建国以来の歴史』を書き始めるにあたり、サルスティウスの著作、とりわけ『歴史』を強く意識しながら執筆したことは疑いない。そのことは、本書の序言に『歴史』の序言と共通または類似する字句や言い回しがいくつも認められることから明らかである。該当の箇所を以下に列挙しよう。

リウィウス	サルスティウス
「私がローマ国民の事績を <u>国家の起源から書きお</u> <u>おせたとして</u> (a primordio urbis res populi Romani perscripserim)」(1)	「私は…ローマ国民の戦時および平時の事績をま とめた (res populi Romani…composui)」(1.1M) 「 <u>国家の起源から</u> (a principio urbis) ペルセウスに 対するマケドニア戦争まで」(1.8M)
「 <u>かくも大勢の歴史家の一員に</u> (in tanta scriptorum turba) 列せられれば」(3)	「 <u>かくも大勢のきわめて学識豊かな者たちの中に</u> (in tanta doctissimorum copia)」(1.3M)
「 <u>真実を曲げさせる</u> (reflectere a vero) とまではい わないが」(5)	「 <u>私を真実から反らす</u> (movit a vero) ことはなかつ た」(1.6M)
「 <u>平時, 戦時における</u> (domi militiaeque) そのあり ようは」(9)	「私は…ローマ国民の戦時および平時の (militiae et domi) 事績をまとめた」(1.1M)
「 <u>綱紀が徐々に</u> (paulatim) 弛むに従って, <u>道徳が</u> (mores) <u>いかに廃れてきたのか…それは…傾き,</u> <u>倒壊寸前となって</u> (praecipites) …われわれが自 らの病にもその治療法にも <u>耐えられなくなった</u> (pati) …」(9)	「 <u>わが祖先の慣習は</u> (mores), それまでのように <u>徐々に</u> (paulatim) <u>低下するのではなく…転落した</u> <u>のである</u> (praecipitati) …自らの家産を保持する ことも, 他者にそうさせることも <u>できない</u> (pati) (1.16M)

リウィウスの序言を読んだローマ人読者の多くは、きっとサルスティウスを想起したに違いない。こうした模倣の手法によりリウィウスが目指したのは、もちろん単なる先輩史家へのオマージュではない。どのような作家であれ、自らの著作の意義や独自性というものを何らかの仕方で訴えようとするものである。彼もまた、著名な先行作品を真似た書き方をすることで、むしろそれとの差異を浮き彫りにしようとしたのだと考えられる¹⁵⁾。ではリウィウスが序言で示そうとしたサルスティウスとの差異とは何か。

かつてR・M・オグルヴィは¹⁶⁾、ローマ人を道徳的頹廢へ陥らせた要因としてリウィウス(序論11節)がサルスティウス(Catil.10)と同じく「貪欲(avaritia)」を挙げる一方、後者がこれと並んで重視する「野心(ambitio)」に言及していない事実に着目し、こう論じた。リウィウスの見方によれば、「野心」は「貪欲」と異なり早い時代からローマに存在した悪徳である。ローマ人の悪徳はすべて後代になって初めて現れたわけではない。彼は序言であえて「野心」に言及しないことで、暗黙のうちに、ローマ人の墮落は前146年を境に一気に始まったとするサルスティウスの単純な史観を批判しているのである。と。「彼にとって、歴史の経過は黒から白への直線的な進行ではなく、善と悪とが織り交ざった格子縞模様のパッチワークなのであった。」こうしたオグルヴィの見解はかなり広く受け入れられてきたように思われる¹⁷⁾。だが筆者はこれに少々疑問を感じる。リウィウスが序言で念頭に置くのはサルスティウスの主に最後の著作『歴史』だが、先述のように、サルスティウスはそこで前作までの考えを改め、「歴史の経過は黒から白への直線的な進行」とするような理解を放棄している。すなわち、彼はもはや前146年で時代を截然と区切る見方をしていないのである。実際『歴史』の断片には、次のような一節が認められる。「不和や貪欲や野心や他の順境の時に現れるのを常とする諸悪徳は、カルタゴの破壊後に最大限に増長した」(1.11M)。これによれば、貪欲も野心もカルタゴの破壊後に「最大限に増長した(maxime aucta sunt)」のであって、必ずしもその時に初めて現れたとい

うわけではない。

彼が史上最も悪影響を及ぼした要素と見なすのは市民間の「不和 (discordia)」であり、この悪徳ゆえにローマ人の道徳性は、共和政開始以来第二次ポエニ戦争に至るまで漸次的に低下していったとされる。リウィウスもまた同様にローマ初期史を不和が猖獗をきわめた時代ととらえている。『ローマ建国以来の歴史』の現存する最初の10巻(前292年までを扱う)では、貴族と平民の闘争が内政史の主要なモチーフをなしている。続く失われた第11～20巻でこの問題がどう扱われたかは不明だが、現代の一般的なローマ史理解によれば、身分闘争は前287年のホルテンシウス法の成立をもって終息したとされるため、リウィウスの記述も同じだったとつい思われがちである。だが実際そうだったことを裏づける証拠はない。第二次ポエニ戦争期を扱う第三デカーデ(第21～30巻)では、なるほどすでに身分対立をめぐる話題は後景に退いているが、しかしそれがすっかりなくなるわけではない。カルタゴとの大戦争の合間にも、両身分の確執が表面化する出来事が時おり起こるのである¹⁸⁾。リウィウスもここまで不和の時代が継続していたと見ていた節がある¹⁹⁾。

こうして見ると、リウィウスとサルスティウスの歴史理解には共通する面が多々あるように思われる。とはいえ、両者の間に基本的な認識の違いがあるのも確かである。『歴史』においてサルスティウスは、ローマ史のほぼ全体——王政期と第二次・第三次ポエニ戦争の戦間期を除き——を道徳が低下した時代として灰色のイメージで塗りこめる。これに対しリウィウスは、墮落が始まる以前のローマをより明るいイメージで——この時代に悪徳が存在しなかったわけではないが——とらえる。「しかし私にとっては、昔の事柄に目を向けているかぎりにおいて、われわれの時代が長い間目撃してきた悪徳を直視する必要がなくなるばかりか、書き手の筆を鈍らせる(事実を曲げさせるとまではいわないが)さまざまな慮りから逃れることができるということは、苦勞に見合う褒美であるといえる。」序言のこの一節(5節)には、初期の輝かしい時代と悪徳に満ちた自らの時代とが明瞭に対比されている。「人々の暮らしや道徳のありようはいかなるものであったのか。ローマの支配権はいかなる人物によって獲得され、拡大したのか。また、平時、戦時におけるそのありようはいかなるものであったのか。」この一文(9節)からは、支配権が拡大しつつあった時代のローマ人はなお道徳性に富んでいたとの認識が見て取られる。リウィウスにしてみれば、ローマは悪徳に侵されることが比較的遅い国家であった。「貪欲と豪奢がこれほど遅くに流入し、清貧と儉約にこれほど大きな誉れが、これほど長くあたえられた国はないと思われる」(11節)。要するに、リウィウスはローマ人の墮落は比較的あとの時期に始まったと見なすわけで、この点でサルスティウスの見方との間に大きな違いがある。

リウィウスの理解によれば、ローマ人の墮落は国家の拡大により引き起こされたものである。「最初はささやかな始まりにすぎなかった国家が、いまでは自らの重みに耐えかねるほど大きくなってしまっている」(序言4節)。はたして彼が考える墮落の始まりはいつからなのか。作品中でその兆しが最初に語られるのは、第二次ポエニ戦争期の記述である。シキリアや南イタリアのギリシア人諸都市を、ローマ人兵士たちは貪欲に駆られて略奪した(25.31; 29.9)。マルケルスはシュラクサイ攻略後その美術品を略奪し、ローマへ持ち帰った(25.40)。さらにスキピオ軍の将兵たちはアフリカへ渡る途中、シュラクサイで奢侈に耽り無規律に陥ったとされる(29.19)。「奢侈」と「貪欲」は序言で言及される代表的悪徳だが、これらがローマ人やローマの軍隊に当てはめられることは、第10巻の終わり(つまり前3世紀初めの記述)まで基本的

にはない²⁰⁾。「貪欲」で「奢侈」的なローマ人が現れるのは、第二次ポエニ戦争期の記述からである。

ローマ人の墮落が本格的に始まったのは、彼らが東方世界へ進出し、その享樂的で頹廢的な文化の影響を受けるようになってからだとリウィウスは考える。彼のそうした見方は、登場人物カトーの言葉に明確に言い表されている。オッピウス法の廃止に反対して行ったとされる演説（前195年。これがリウィウスの創作であることは間違いない²¹⁾）でカトーは、「ローマ人は二つの異なる悪徳、貪欲と奢侈（これらは偉大な支配をすべて駄目にする病である）に苛まれている」とし、続けてこう述べる。「国家の命運が日々より良く、より幸運になればなるほど、また支配が拡大すればするほど（われわれはすでに、欲望へと誘うあらゆるものに満ちたギリシアとアジアへ渡り、王の財宝に指を触れた）、われわれがこれらのものをコントロールするというより、これらがわれわれをコントロールするようになるのではないかと、私は恐れる」（34.4.2-3）。第34巻に現れるこのカトーの発言は予言的なものだと言える。ローマ人が実際「貪欲と奢侈に苛まれる」状況が具体的に描かれるようになるのは、第38巻におけるマンリウス・ウルソのアシア遠征（前189年）の記述からである。マンリウスとその軍隊は任地のガラティア地方で強欲な略奪を繰り返したのち（38.12sq.）、帰国して華々しい凱旋式を挙げた。リウィウスは「外国由来の贅沢の始まりはアジアの軍隊により首都へ持ち込まれた」とコメントした上で、この時導入された奢侈品として、食食用寝台や高価な織物、一本脚のテーブル、食器棚、女芸人、料理人などを挙げている（第39巻第6章。先述のように、この箇所はおそらくピソが典拠の一つとなっている）。同じ第39巻では、さらにギリシア由来のボックス神崇拜が引き起こした有名な騒動（第8章以下）、ケンソルのカトーによる不道德な元老院議員の除名、奢侈品への課税などの話（第42章以下）が語られ、ローマ人のモラルの低下ぶりを印象づける。その後の現存する諸巻（第40～45巻）でも、ここで逐一列挙はしないが、同様な貪欲や奢侈を示すさまざまな事例に加えて、往古のローマ人の謹厳さや誠実さとは対照的な将軍たちの身勝手な振る舞いと無能力、兵士たちの無規律、同盟者や敵に対する傲慢・残虐な行為などの話が次々と述べられる²²⁾。

T・ルースが強調するように²³⁾、リウィウスにあってローマ人の墮落は徐々に、段階を経て進行したと言える。サルスティウスも『歴史』において墮落は漸次的に進んだと見なしており、その意味で両者の認識は共通しているが、しかし後者が共和政期ローマの歴史全体を頹廢の過程ととらえるのに対し、前者はある時期（第二次ポエニ戦争期頃）からそれは始まったと考える。またサルスティウスは第二次・第三次ポエニ戦争の戦間期をローマ人のモラルが比較的高まった時期とするのに対し、リウィウスはまさにこの戦間期にこそモラルの低下が本格的に開始したと考える。墮落の過程の具体的なイメージの描き方は、両史家の間でかなり違いがあると言ってよいだろう。ではサルスティウスがローマ史上最も重大な転換点と見なした前146年のカルタゴ滅亡について、リウィウスはどのような見方をしていたのだろうか。「敵への恐れ」が内部対立を抑制するという観念を、リウィウスもまた共有していたことは確かである²⁴⁾。彼の作品にはこうした観念に基づく記述がいくつか見られる。一例のみ掲げると、「しかし外敵の脅威は、市民を一致させる最大の絆であり、いかに互いが疑心と憎悪を抱き合っていたにせよ、両者の心を結びつけずにはおこななかった」（2.39.7）といった一節などはそうである（他に1.19.4; 2.54.2; 3.9.1; 30.44.8; 34.9.4; 39.1.2）。『ローマ建国以来の歴史』の第三次ポエニ戦争期を扱った部分は現存しないが、しかし本書の梗概『ペリオカエ』から、該当の第48～49

巻で主戦派カトーと反対派スキピオ・ナシカの議論がかなり重点的に述べられたことが確認される。リウィウスがスキピオ・ナシカによる「敵への恐れ」の主張——なるほどそれは『ペリオカエ』には現れないが——を描いたことは間違いないだろう。以上の状況証拠からすると、彼が前146年を転換点とする見方に同意していた可能性は十分ありそうである。このことを間接的に裏づけられる興味深い記述がある。第二次ポエニ戦争の最後の場面で、敗戦後多額の賠償金の支払いに慌てふためく同国人たちを見てカルタゴ人将軍ハンニバルは笑う。これを見咎めた者たちに対し彼は皮肉に満ちた返答をするのだが、その中に次のような文句がある。「ローマ人が諸君の安穩に配慮してくれるなどと考える理由はない。偉大な国家が長きにわたり安穩でいられることはない。もし外部に敵がいなければ、内部にそれは見いだされる。強健な肉体が外部の要因からは無事なように見えても、自らの力のせいで苦しめられるように」(30.44.7-8)。ハンニバルがここで述べるのは、外敵(ローマ)との戦いののち互いに反目し合うカルタゴ人についてである。だがこの一節を目にしたローマ人読者は、その後の自らの歴史を連想せずにはいられなかっただろう。第二次ポエニ戦争から約半世紀後にカルタゴを最終的に殲滅したのち、外敵脅威を失ったがゆえに自国が陥った墮落と内戦とを、である。リウィウスはもちろんそのような読まれ方をすることを予期して、この部分を書いたはずである²⁵⁾。

リウィウスと先行する史家たちとの関係性はやや複雑である。現存する巻に見る限り、彼は基本的に、外国(とりわけギリシア)の慣習・文化がローマ人にあたえた悪影響を強調するピソ流の認識に基づいて叙述を行っている。そのことは、序言の「貪欲と豪奢がこれほど遅くに流入し、清貧と儉約にこれほど大きな誉れが、これほど長くあたえられた国はないと思われる」(11節)という文句にも、象徴的に表されていると言える。しかし彼はサルスティウス流の、「敵への恐れ」の喪失がローマ人のモラルの低下を招いたとする見方もまた受け入れている。もちろんピソ流とサルスティウス流の見方は、決して相容れないものではない。ギリシア文化の影響が墮落の引き金を引き、「敵への恐れ」の喪失がさらにそれを進めた、という理解もありうるだろう²⁶⁾。前167年の記述(第45巻)で終わる現存巻において「敵への恐れ」の視点は暗示的に示されるに過ぎないが、カルタゴ滅亡後の時代を扱うその後の失われた諸巻で、それがより前面に押し出された可能性は大いにある。

リウィウスとサルスティウスの共通性をより強く感じさせるのは、その歴史認識の陰鬱さである。『ローマ建国以来の歴史』の序言に見える暗いペシニズムは、サルスティウスの影響によるところが小さくないだろう。しかしそれは同時に、両史家が共有する前1世紀の内戦の経験に由来するものとも言える²⁷⁾。一口に墮落史観の史家と言っても、こうした経験を持たないピソは1世紀のちの史家たちが抱くようなペシニズムとは無縁だったと推察される。ピソが同時代の世相に頹廃を見て取ったのは事実だとしても、それは本質的には、今は昔と比べて人々のモラルが低下したという、あまたの時代や地域で認められる道徳家の慨嘆からそう遠いものではないだろう。ローマが本格的に東方進出に乗り出す以前、発展する祖国の状況に並々ならぬ誇りを抱きながら自国史を著したファビウス・ピクトルですら、ローマ人の墮落の一面を感じ取っていた²⁸⁾。その意味で、ファビウス、カトー、ピソとサルスティウス、リウィウスとの間には大きな断絶がある。

リウィウスは序言の終わり近くで、読者に対し、歴史から教訓を得て自らの行動の指針となすよう求めている。「輝かしい歴史の記念碑に刻まれたあらゆる種類の事績を教訓として見つ

めることは、歴史を学ぶ上できわめて有意義かつ有益なことである。歴史をたどり、諸君と諸君の国家にとって見習うべきものがあれば、それを選ぶがよい。そして、おどましく始まり、おどましく終わったものがあれば、それを避けるがよい」(10節)。こうした一節は、彼のペシスティックな史観に微妙な明るさをもたらしている。というのも、もし墮落の行く先にまったく改善の見込みがなければ、歴史の教訓を学んで今後に生かすよう、ローマ人読者に忠告する余地もなさそうに思われるからである。この点につとに注目したのがH・オッペルマンである²⁹⁾。彼によると、リウィウスはサルスティウスのペシミズムをむしろ批判しようとしたのである。墮落の時代はローマ史における一つのエピソードにすぎない。歴史を手本として学ぶことで、ローマ人はこの悪しき時代を終わらせることができる。本書を通じリウィウスはそのような「希望」を読者に呼び起こそうとしているのだ、と。これまでの本稿の議論からも分かるように、リウィウスがサルスティウスのペシミズムを批判しようとしたとするオッペルマンの見解に筆者は同意しない。だが彼が墮落からの転換の「希望」を抱いていたというのは、確かにその通りであろう。そしてリウィウスとサルスティウスの墮落史観を根本的に分かつ特徴があるとすれば、それはまさにこの点だろうと思われる。では、彼の「希望」ははたして何に困って来ているのだろうか。

『ローマ建国以来の歴史』の序言は、最初の5巻(第一ペンターデ)の刊行時に合わせて世に出されたと考えられる。第一ペンターデがいつ完成・公表されたかについては、本文の内容からある程度推測することができる。第1巻でリウィウスは、戦時に開かれ平時に閉ざされるヤヌス門はヌマ王の治世以降これまで2度閉じられたとし、2度目の閉門は「アクティウムの戦い(前31年)の後、将軍カエサル・アウグストゥスによって海陸ともに平和がもたらされたとき」なされたこと述べている(1.19.3)。このことから、本巻が書かれたのは、オクタウィアヌスに「アウグストゥス」の尊称が付与された前27年1月16日から、彼がヒスパニア征服後ヤヌス門を3度目に閉ざした前25年までの間と見るのが、最も一般的な見方である³⁰⁾。ただしこの見方には異論もある。第1巻の当該箇所、および第一ペンターデでアウグストゥスに言及がなされるもう一つの箇所(4.20.7. 後述)は、見様によっては周囲の部分からやや浮いた、取って付けたような印象をあたえなくもない。そのため両者を、前27年以前に公表された最初のヴァージョンに著者自身がのちに付け加えた挿入と見なす意見が古くからあり、これを支持する研究者も少なくないのである³¹⁾。どちらの見方が正しいかの議論はここではひとまずおくことにしよう。その代わりにこの問題と関連して、以下、アウグストゥスの名が登場する先述のもう一つの箇所について若干の確認をしておきたいと思う。

リウィウスは第4巻で前437年の出来事として、軍団副官(トリブヌス・ミリトゥム)のコルネリウス・コッススがウェイ王トルムニウスを一騎打ちで破り、奪い取った武具を榮譽戦利品(スポリア・オピマ)としてユピテル・フェレトリウス神殿に奉納したと述べる(4.19.1-20.4)。ところが続いて彼は、アウグストゥスが同神殿でコッススの奉納品に「コンスル(最高司令官)」の職名が書かれているのを見たという目撃談を紹介し、コッススは実は軍団副官ではなくコンスルだった時(前428年)にこの偉業を達成したのだと、直前の記述をあらためている(4.20.5-7)。このいささか唐突な変更が挿入によるものなのかどうかはさておき、コッススの武具にまつわる情報がアウグストゥスから史家へ知らされた背景には、当時のある政治状況があったと見るのが今日の定説である。前29年にマケドニア総督リキニウス・クラッス(前30年コンスル)はバスタルナエ族の王デルドを倒したのち、奪い取った武具を榮譽戦利品とし

て奉納したいと求めた。だがオクタウィアヌスは彼が最高司令官ではなかったことを理由に、この求めを拒否した (Dio Cass.51.24.4)。かつてコッスが軍団副官として榮譽戦利品を捧げたというのは、そのようなオクタウィアヌスにとってはなはだ不都合な「先例」である。そこで彼はコッスが軍団副官ではなくコンスルだった事実を明るみに (捏造?) することで歴史の修正を図ったのであり、リウィウスに記述をあらためさせたのもその一環と見られるのである³²⁾。さて、もし以上のような政治的背景があったのだとすれば、アウグストゥスからリウィウスへの働きかけは、第一ペンターデの公表前か公表後間もない状況でなされなければならなかっただろう。公表後かなりの時間が経ち、コッスを軍団副官として描いたテキストが次々筆写され流布した段階では、もはや修正を施す意味はなかっただろうからである³³⁾。クラッスが上記の要求を申し立てたのは、おそらく彼がローマに帰還した前28年の終わり頃と思われる。オクタウィアヌス (アウグストゥス) がリウィウスに働きかけを行ったのは、したがってそれから1～2年以内のことだろう。かりにアウグストゥスへの言及箇所はのちに挿入されたとの立場に立ち、第一ペンターデの最初のヴァージョンは前27年より前に公表されていたと考えるにしても、その時期はさほど前には遡らない (前29～前28年頃か) と推定される。

リウィウスは後10年代に没するまでの約40年間に全142巻を記した。平均して1年に約3巻のペースで筆を進めた計算になるが、しかし最初の5巻に関してはもっと時間をかけ、より入念に構想を立てて執筆したと見るのが適当だろう³⁴⁾。かりに完成したのが前29～前28年頃であるにせよ、構想や執筆の着手がアクティウムの戦いと同時期、あるいはそれ以前に遡る可能性は十分ある³⁵⁾。とはいえ、序言というのは本論の完成後に初めて書かれるか、または最初に書かれても、最後にあらためて見直されるのが通例と思われる。よってその論調は、結論的にはやはりアクティウム後の著者の意識を反映していると言えるだろう。アクティウムの戦いの結果とその後の情勢をリウィウスがポジティブに評価したことは間違いない。アウグストゥスへの直接的な言及箇所からは、彼に対する史家の共感ないし敬意が明確に見て取られる。序言に現れるほのかな明さは、おそらく執筆時の政治情勢に対するこのような前向きな認識に少なからず由来すると考えられる。

むろん、リウィウスは現状を手放しで楽観視していたわけではない。さもなければ、彼のペシミズムの色調はもっと和らいでいてもよかつたはずである。史家の心情は今少し複雑である。序言9節で彼は現在の時代を、道徳がすっかり廃れ、「われわれが自らの病にもその治療法にも耐えられなくなった」状態だとしている。ここで彼の言う、ローマ国家が陥った「病 (vitia)」の「治療法 (remedia)」とは一体何だろうか。H・デッサウ以来の定説によれば、それは前28年のアウグストゥスの結婚法を指すとされる。若者に結婚を促し、風紀の匡正を図ろうとしたのが同法の趣旨だが (Propertius 2.7)、それは反対に遭い撤回された³⁶⁾。一方、近年の研究はこれに対しまったく異なる見解を打ち出している。「治療法」とは、内戦を終息させる方策としての政治形態、すなわち独裁 (dominatio) を意味するとするのである³⁷⁾。リウィウスは他に2つの箇所で、同じ医学的メタファーを用い、病にかかった国家を救済するための「治療法」について述べている。「この国は通常の治療法では立ち行かないほど病んでいる。国家はいま、独裁官を必要としている。国家を揺るがそうと動く者があれば、独裁官の在任中には上訴権が存在しないことを思い知るだろう」(3.20.8)。「同じように、病んで弱った国家に困難が降りかかった場合、それは事の大きさによってではなく、もはやこれ以上の打撃には耐えられなくなった体力の低下ぶりによって評価されるべき、と考えたのである。そこで人々は、久しく望まれず

用いられることのなかった治療法、つまり独裁官を任命するという手段に訴えることにした(22.8.4-5)。どちらの用例においても、「治療法」はある種の独裁的制度である独裁官の任命を表すものとして使われている。さらに同様のメタファーはタキトゥスにも認められる。タキトゥスの伝えるところによれば、アウグストゥスが没した時、「思慮ある人々」の間で彼の統治について「一人の者により支配されること以外に、分裂した祖国を救う治療法はなかった」との論評が語られたという(Tac.ann.1.9.4)。以上の史料証言はかなり決定的であるように筆者には思える。問題となっている序言9節の文章の主語は確かに「道徳(mores)」だが、陰鬱な調子で語る史家の心底に、単に道徳的次元の問題意識だけではなく、ローマ人の墮落が引き起こした国家の分裂と内戦という重い現実があったことは疑いない。そのような現実が一片の道徳的立法(結婚法)で解決されるとは、史家も考えなかつただろう。近年の研究が示すように、「治療法」は独裁を指すと見てほば間違いないと言える。さて、もしそうだとすると、「われわれが自らの病にもその治療法にも耐えられなくなった」は、独裁という劇薬さえいまだに病を治療させるに至らないとの史家の診断を意味することになる。スラヤカエサル、三頭政治家の独裁がもたらした平和は一時的なものに終わった。アウグストゥス(オクタウィアヌス)の平和もまたそうならない保証はないのである。歴史的事実としては確かにアクティウムの戦いをもってローマの内戦は終結し、アウグストゥスの統治の下国家の安定が果たされた。だが同時代人々の目には、前31年以後もなお事態は流動的に思えたのだろう³⁸⁾。

リウィウスがアウグストゥスの独裁に肯定的だったかどうかと言えば、答えはイエスだろう。先述のように、史家のこの独裁者に対する態度は非常に好意的である。ただし彼が肯定したのは、現代人が「帝政」もしくは「元首政」と呼ぶところの新たな体制ではなかつた。アウグストゥスの独裁がそれまでの政治とは本質的に異なるものであるとの認識は、彼の晩年、あるいは遅くとも彼の権力を世襲的に引き継いだティベリウスの治世にはなされるようになっていたと思われる(例えばストラボン[6.288])。だがこの新体制が始まった当初、リウィウスを含む同時代人の大多数は、おそらくアウグストゥス自身ですら、従前の「国家(レス・プブリカ)」=「共和政」が他に選択の余地なき体制としてなお継続しているし、継続するべきだと考えていた。リウィウスは完全に共和政の人である。彼にとってアウグストゥスの独裁は共和政の枠内にある、またそれを補強するものとして意識されていたに違いない³⁹⁾。

最後に、リウィウスの「希望」の別な要因にも目を向けておきたい。A・J・ウッドマンによると、リウィウスがポジティブな意識を抱いた背景には、古代世界に広く見られる循環史観の思想があっただろうとされる。これは、あらゆる文明は墮落と再生を繰り返すという思想であり、その一つの形をポリュビオスの政体論——あらゆる政体はやがて必然的に墮落し、その後別のより好ましい政体にとって代わられる(6.57)——に見て取ることができる。ポリュビオスの史書を主な典拠の一つとして用いたリウィウスにとって、この史観はむしろ馴染み深かつたであろうし、彼に及ぼしたその影響をまったく否定はできないだろう⁴⁰⁾。だがはたして内乱の現実裏打ちされた彼のペシニズムが、循環論という一般理論、すなわちいづれ墮落から再生の局面に移るはずとの漠たる予期によってどれほど軽減されえたか、疑問を感じないわけではない。むしろより強調されるべきは、ローマ人の歴史と国民性に対する彼の強い誇りと信頼ではないかと思われる。『ローマ建国以来の歴史』には彼の国民的プライドが随所ににじみ出ている。ペシニスティックな調子の序言においてさえ、今とは対照的な過去のローマ人の栄えある歴史が賛嘆をもって語られる。ローマ人はその優れた道徳性ゆえに発展し、諸国民を従え、広範囲

にわたり支配権を及ぼした(9節)。彼らは祖先の立派な手本を学び、これに倣うことでその道徳性を長く維持してきた。これほど偉大で、敬虔で、良い先例に富む国家はなかったし、ゆえに外国から流入した貪欲や豪華といった悪徳にこれほど長く冒されなかった国はないのである(11節)。このような卓出した国家が「他ならぬマルス神を国家の祖、建国者の父と呼んでも、他の民族は、ローマの支配を受け入れるのと同じように、その主張を進んで受け入れるだろう」(7節)。ローマの国民性に対する史家の信頼は、墮落を目の当たりにした現在においても決して失われたわけではなかった。過去の手本に倣うことで、彼らはいにしへの道徳性を回復することができるはずだ。国家再生へ向けた彼の希望の根底にあるのは、こうした確信ではないかと思われる。『ローマ建国以来の歴史』執筆の最大の目的は、リウィウスいわく、ローマの歴史をありのままに、良き手本も悪しき手本もすべてひとまとめに提示し、読者に「輝かしい歴史の記念碑に刻まれたあらゆる種類の事績を教訓として見つめる」機会をあたえることで、この再生に史家なりのやり方で資することにあつたのである。

* 本稿における古典史料の表記は慣例に従う。サルスティウス『歴史』の章節番号は Maurenbrecher 校訂本に基づく。史料集の略号は以下の通り。

HRR = H.Peter, *Historicorum Romanorum Reliquiae*, I, Leipzig, 1914².

ORF = E.Malcovati, *Oratorum Romanorum Fragmenta*, Torino, 1974⁴.

FRH = T.J.Cornell (ed.), *The Fragments of the Roman Historians*, I-III, Oxford, 2013.

註

- 1) リウィウスの生没年は、ヒエロニムス『年代記』の証言に基づき伝統的に前59～後17年とされるが、これを5年引き上げるべきとする説も有力である、cf. R.Syme, *Livy and Augustus*, *HSCPh*, 64 (1959) = id., *Roman Papers*, I, Oxford, 1979, 414f.
- 2) 以下、序言ならびに第1～5巻の訳はすべて岩谷訳(『ローマ建国以来の歴史』第1・2分冊、京都大学学術出版会、2008・2016年)に拠る。
- 3) 'nec vitia nostra nec remedia pati possumus'を医学的比喩と見なし、こう訳した。岩谷氏は「建物の比喩」がここまで及ぶと考え、「われわれが自らの欠陥にも修繕にも耐えられなくなった」と訳す。
- 4) 当該の断片をめぐる議論は、H.Beck/ U.Walter, *Die frühen römischen Historiker*, I, Darmstadt, 2001, 124f.; *FRH*, III, 40f. に詳しい。
- 5) 両法に関してはひとまずE.Baltrusch, *Regimen morum*, München, 1982, 30ff, 52ff. 参照。縮絨工の活動を規制した前217年のメティリウス法も、奢侈禁止法の一つと見なしうるかもしれない(*ibid.*, 50f.)。
- 6) 『起源論』の構成をめぐる多々議論があるが(cf. *FRH*, I, 198ff.)、本書の最近の時代を扱う諸巻が主に戦争の叙述からなっていることは、コルネリウス・ネポスの証言(*Cat.*3)や残存する断片から明らかである。
- 7) 当該の断片については、cf. Beck/ Walter, *op.cit.*, 220; *FRH*, III, 140.
- 8) Cf. Beck/ Walter, *op.cit.*, 324; *FRH*, III, 218.
- 9) Cf. A.W.Lintott, *Imperial Expansion and Moral Decline in the Roman Republic*, *Historia*, 21 (1971), 628; Beck/ Walter, *op.cit.*, 320; *FRH*, I, 239. リウィウスによると、前195年に行われた演説でカトーは東方世界との接触がローマ人を墮落させると述べたとされるが(34.4.2-3)、この演説が史家による完全な創作であることは間違いない(J.Briscoe, *A Commentary on Livy. Books XXXIV- XXXVII*, Oxford, 1981, 39ff.)。グルーエンはカトーの「ギリシア嫌い」の俗説を余すところなく批判している、E.S.Gruen, *Culture and National Identity in*

- Republican Rome*, Ithaca/ New York, 1992, ch.2. もっとも、ポリュビオスはベルセウス戦争の頃からローマ人の若者たちの放縦がはなはだしくなったとし、カトーもこれを批判したと証言している(31.25)。東方文化の影響がローマ人を堕落させたとの認識は、前2世紀中頃には広く行われていたと思われる。
- 10) サルスティウスの歴史認識の変化については、cf. F.Klinger, *Über die Einleitung der Historien Sallusts*, *Hermes*, 63 (1928) = V.Pöschl (Hg.), *Sallust*, Darmstadt, 1981, 1ff.; P.McGushin, *C. Sallustius Crispus. Bellum Catilinae*, Leiden, 1977, 68; K.Büchner, *Sallust*, Heidelberg, 1982², 318ff.
- 11) Cf. M.Gelzer, Nasicas Widerspruch gegen die Zerstörung Karthagos, *Philologus*, 86 (1931) = id., *Kleine Schriften*, II, Wiesbaden, 1963, 39ff. 一般にディオドロスのこの箇所はポセイドニオス(前2世紀後半から前80年代半ばまでの歴史を記した)に由来するとされる。その史実性に懐疑的なのは、W.Hoffmann, *Die römische Politik des 2. Jahrhunderts und das Ende Karthagos*, *Historia*, 9 (1960), 340ff.; W.V.Harris, *War and Imperialism in Republican Rome 327-70 B.C.*, Oxford, 1979, 127f.
- 12) Hoffmann, *op.cit.*, 342ff. 同意するのは、E.Badian, *Roman Imperialism in the Late Republic*, Pretoria, 1967, 7; Harris, *op.cit.*, 128.
- 13) クリンガー(Klinger, *op.cit.*, 21f.)は、前146年を転換点とする歴史認識を初めて示したのはポセイドニオスであり、彼はスラによる国家再建をカルタゴ滅亡後ローマが陥った堕落の克服と見なした、と考える。
- 14) 同様の見方を示した以後の作家として、プリニウス(*nat.hist.*33.150)、ウェレイウス・パテルクルス(1.33.1)、アウグスティヌス(*Civ.dei* 1.30)、オロシウス(5.8.2)の名を挙げられる。このうちパテルクルスとアウグスティヌスは明らかにサルスティウスの著作から強い影響を受けている。
- 15) A.Woodman, *Rhetoric in Classical Historiography*, Portland, 1988, 131.
- 16) R.M.Ogilvie, *A Commentary on Livy, Book 1-5*, Oxford, 1965, 23f.
- 17) Woodman, *op.cit.*, 131; J.L.Moles, *Livy's Preface*, *PCPhS*, 39 (1993) = J.D.Chaplin/ C.S.Claus (eds.), *Livy*, Oxford, 2009, 76f.
- 18) 例えば前216年コンスル選挙をめぐる騒動(Liv.22.34-35)。
- 19) 身分闘争の終結をホルテンシウス法で区切る現代の一般的理解を疑う意見もある、cf. R.v.Ungern-Sternberg, *The End of the Conflict of the Orders*, in K.A.Raaflaub (ed.), *Social Struggles in Archaic Rome*, Oxford, 2005², 312ff.
- 20) タルクィニウス家の女たちの振る舞い(1.57.9)や、前479年コンスルへの非難の言葉(2.48.3)など、少数の事例があるのみ。
- 21) 註9参照。
- 22) 詳しくは、T.Luce, *Livy. The Composition of his History*, Princeton, 1977, 250ff.参照。
- 23) *Ibid.*, 270.
- 24) Cf. *Ibid.*, 271f. リウィウスの拙訳(『ローマ建国以来の歴史』第6分冊, 京都大学学術出版会, 2020年)に付した説明(312頁)は、少々不正確だったかもしれない。
- 25) Cf. D.S.Levine, *Livy on the Hannibalic War*, Oxford, 2010, 12f.
- 26) サルスティウスをポセイドニオスの学派、リウィウスをカトーやピソの流れを汲む「元老院の伝統学派」の代表とするルースの説明(*op.cit.*, 272f.)は、単純化しすぎのように思える。
- 27) 堕落と内戦の現実に対するペシミズムは、多くの同時代人(例えば詩人ホラティウス)に共通した感情と言えるだろう、cf. *Horat.epod.*16(前41年頃); *carm.*3.6(前28年頃)。
- 28) 拙稿「ファビウス・ピクトルの史書に関する覚え書き」『岩手大学文化論叢』第9輯, 2017年, 75-76頁; 「古代ローマにおける歴史記述の始まり」『世界史の研究』261号, 2019年, 59頁以下参照。

リウイウスの墮落史観に関する若干の考察

- 29) H.Oppermann, Die Einleitung zum Geschichtswerk des Livius, *Der Altsprachliche Unterricht*, 7 (1955) = E.Burck (Hg.), *Wege zu Livius*, Darmstadt, 1967, 177ff.
- 30) リウイウス (毛利晶訳) 『ローマ建国以来の歴史』第3分冊, 京都大学学術出版会, 2008年の「訳者解説」268-9頁参照。
- 31) 挿入説は, 古くはW・ゾルタウに遡り, その後J・ベイエやR・サイムらによっても取り上げられたが, これを最も詳細かつ説得的に論じたのはT・ルースである (Luce, *The Dating of Livy's First Decade*, *TAPhA*, 96 (1965) = Chaplin/ Kraus, *Livy*, 17ff.)。以後この説を支持する研究者は多い (cf. Moles, *op.cit.*, 69)。
- 32) Syme, *op.cit.*, 417ff.; Luce, *op.cit.* (in Chaplin/ Kraus), 40; 毛利「訳者解説」269頁以下参照。
- 33) Luce, *op.cit.*, 41.
- 34) Luce, *op.cit.*, 38. 最初の5巻 (第一ペンターデ) は現存する他のペンターデと比べ, 分量も多い (語数にして約88,000と, 他より1~3万語程度多い, cf. D.M.Packard, *A Concordance to Livy*, I, Cambridge Mass., 1968, v)。
- 35) Luce, *op.cit.*, 46; Woodman, *op.cit.*, 135; G.B.Miles, *Livy. Reconstructing Early Rome*, Ithaca/ New York, 1995, 92f. 第一ペンターデ公表の時期の引き上げに慎重な意見も依然としてある, cf. R.von Haehling, *Zeitbezüge des TLivius in den ersten Dekade seines Geschichtswerk*, Stuttgart, 1989, 191ff.
- 36) H.Dessau, Die Vorrede des Livius, in *Festschrift Otto Hirschfeld*, Berlin, 1903 (未見)。この解釈は Weissenborn-Müller, Ogilvieのリウイウス註釈にも採用され, 通説化した。
- 37) Syme, *op.cit.*, 416f.; Woodman, *op.cit.*, 133; Haehling, *op.cit.*, 213; Moles, *op.cit.*, 69f.
- 38) Syme, *op.cit.*, 417; Moles, *op.cit.*, 69.
- 39) リウイウスとアウグストゥス (元首政) の関係性については, cf. J.Deininger, *Livius und der Prinzipat*, *Klio*, 67 (1985), 265ff.; K.Galinsky, *Augustan Culture*, Princeton, 1996, 280ff.
- 40) Woodman, *op.cit.*, 138f. マイルズは, リウイウスにはポリュビオスとは異なり, 没落から再生への転換を必ずしも必然視しない独自の循環史観があったと見る, Miles, *op.cit.*, 75ff.